

日本民家園だより

特集 多摩川と暮らし

vol. 101



企画展「おばあさんは川へ洗たくに—山と川的生活史Ⅱ—」

2025年1月4日(土)～5月25日(日)

手前写真：昭和48年廃止前の管の渡し

奥写真：現在の管の渡し跡

中面・裏表紙写真：現在の登戸の渡し跡周辺

(1) 多摩川の流れ

多摩川が水源地・水干から東京湾にそそぐまでの流域面積は約 1240 km²。江戸時代には奥多摩の木材が江戸での度重なる火災からの復興に使われましたが、木材を運んだのは多摩川の流れです。木材だけでなく山間地で焼かれた炭なども、組まれた筏で下流に運ばれ、大正時代のはじめまで「筏流し」でにぎわいました。

また、江戸時代の始めから中期にかけて、玉川上水、二ヶ領用水、六郷用水などの大規模な利水開発が進みました。沖積低地から河川氾濫原だった土地に、大規模な灌漑技術を用いて川の水を取り込み、水田面積が急速に拡大しました。かつて、川崎市内の平地は、この利水開発の恩恵を受け、豊かな水田地帯を形成していました。たとえば、「稲毛米」は幕府や皇室に献上するほど人気が高くおいしい米だったそうです。稲作以外に、直接人々の生活用水にも使われました。さらに、六郷大橋が架り川崎宿が形成され、大師河原での塩田開発が実施されました。

旧原家の屋敷はもともと三方を農業用水路で囲まれていましたが、今は暗渠となっています。屋敷の跡が少しだけ水路跡よりも高くなっているのが名残です。これら水路にはきれいな水が流れていて、子どもたちはドジョウやフナを捕って遊んだそうです。裏門前の川幅 3 尺ほどの水路はトライ舟を浮かべるくらい水量もあり、農家がこの川で鍬や野菜を洗ったり、あるいは食器の洗いや洗濯をしたり、とてもにぎやかだったといえます。その後、これらの流れはすべて蓋で覆われましたが、雨が多いとあふれてきたそうです。

近代以前、多摩川を渡る方法は橋梁と渡船でした。上流では木製の橋、中・下流ではほとんどが渡船で、渡船場は 27 か所に及びました。六郷の渡し、羽田の渡しなど下流域は年間を通し渡船でしたが、中流域では、秋から春にかけての渇水期は仮橋が設置されました。渡船とは別に、年貢米や農産物、林産物を江戸へ送るための舟運も頻繁に行き交い、アユ漁の漁船や川砂利採集と輸送のための船も往来しました。当時の多摩川は、現代よりもずっと人々にとって生活に密着した場でした。

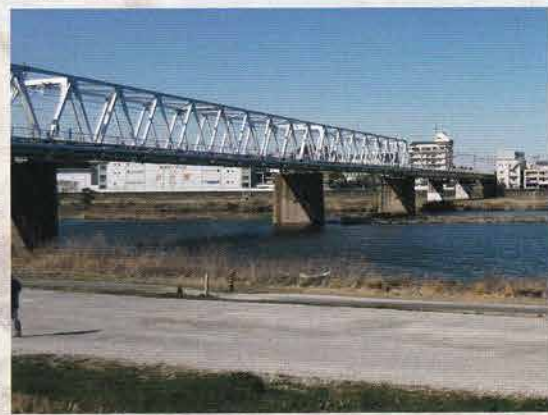


現在の原家旧住宅表門（川崎市中原区小杉陣屋町）：

周辺の用水は暗渠になっていて当時の面影はない



昭和 46 年の菅の渡し：渇水期で仮橋が架かる



現在の菅の渡し跡

(2) 景観と人々の生活

江戸時代、徳川將軍家への御用船とあって多摩川はアユの産地として知られ、川漁が盛んでした。明治以降も、二子玉川（東京都世田谷区）周辺が東京市民（当時）の行楽地として発展していく中で、アユ料理を売りにした割烹旅館や料理屋が増え、川漁を見ながら宴席を楽しむ屋形船が多摩川に浮かびました。アユ漁は水量も多く江戸時代からの景観を保っていた昭和初期頃まで盛んでしたが、上流部の河川利用工事や二ヶ領用水の取水堰がコンクリートに改良されると、水量が減りアユの遡上も妨げられ伝統的漁法は消えていきました。昭和 30 年代以降は、周辺の都市化、農村における農薬の使用にともなって河川は汚濁が進み棲む魚も急激に減少します。そして、伝統的なアユ漁もほとんど見られなくなったのです。

アユ漁は友釣りがあるのですが、川底に大きい石の少ない多摩川ではコロガシと呼ばれる錘をつけた釣糸に針を 5～6 本付けて瀬の早いところでアユをひっかけて釣る漁が行われ、菅地区（多摩区）ではこの方法で漁をする人が多かつ

たそうです。また、伝統的な投網漁（トアミ／ナゲアミ）が盛んで、直接川に入る徒投網（カチウチ）と、船投網（フナウチ）とがありました。^{ますがた}柵形（多摩区）の小泉重盛さん（昭和18年生）はこどもの頃10歳年上の兄の手ほどきで多摩川のアユ漁を手伝っていたそうです。アユは苔が付くところで育ち、瀬のある流れのはやいところやよどみになっているところにいたそうです。小泉さんは投網を使いアユ漁を行いました。川の中から投網を打つ人もいましたが、小泉さんは船から打ち、船中には生簀^{いけす}がありました。水に浸かっている舟のような形の桶で、活かしたアユを入れておきました。網が浮かないように川下から川上に向かって流れにのせて打ち、音に敏感なアユに気づかれないよ



う静かに網を引きます。川の中で打つ際は、兩岸からロープを引いて一斉に川上から打ちました。投網は、亀戸の商店で購入した糸を母親が専用の工具で編んで作ったもので、漁の修練度で糸の太さから網の目の大きさまで変えてくれたそうです。カゴやビクは近所で購入しました。川漁は本業ではありませんでしたが、小泉家は漁業組合に入り、6月から10月までの漁期間、^{しゆくがわら}宿河原の中島から^{うなね}宇奈根（高津区）あたりで漁を行いました。アユは料亭などに高級魚としておりました。

近世の多摩川鮎漁の様子

斎藤長秋編『江戸名所図会』第3（角川書店・昭和42年）国立国会図書館デジタルアーカイブ画像利用

流れがよどんでいるところを好むナマズ、ウナギ、コイなどはミミズを餌にして延縄漁^{はえなわ}で獲ったそうです。多摩川の支流や用水路（エダガワ）でもウナギやナマズが捕れました。ウナギの巣穴に電線を差し込んで（発電機を取り付けた）自転車をこいで発電し、ウナギを痺れさせて獲ることもあったそうです。

小泉さんに、子どもの頃と現在とで、多摩川の景観がどのように変わったか聞いてみました。昔の多摩川は岸が砂利で、夏は熱くて歩けないくらいだったといいます。堤防の中にはぶどう園が広がっていました。砂利を採取しなくなってからの川岸には泥がたまり、草が鬱蒼と生えて「きれいではなくなりました」そうです。

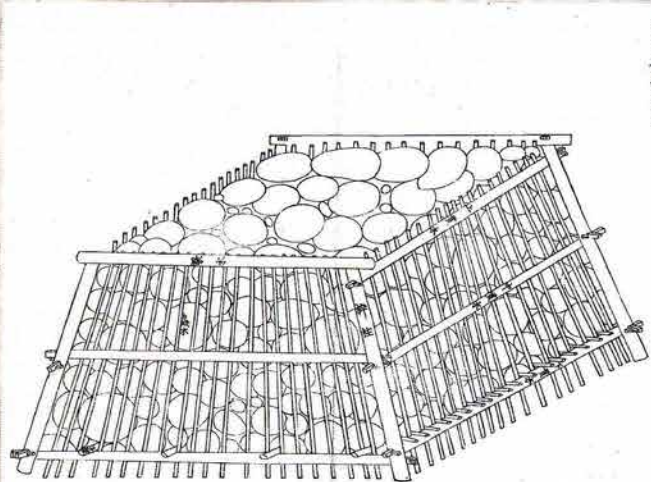
(3) 水害と備え

上流から下流へと138 kmの道程がある多摩川全体の災害史を網羅するには紙面が足りませんので、ここでは川崎市や周辺地域の災害について見ていきます。

江戸時代、河川氾濫原やその周辺が人の暮らしを支える重要な場所になると、水害の多発する「あばれ川」でもある多摩川への防災・減災対策が必要となりました。堤防の築堤・改修や水制の設置、水害防備林の設置など対応がくりかえし図られます。蛇行部を直線化したり、^{たなか きゆうく}田中丘隅考案とされる水制「^{へんげいやく}弁慶杵」を設置したりといった大規模な工事から、浸水に備え床上で使えるかまどを準備しておくなどといった各家での日頃の対策まで、様々な対策が練られました。

弁慶杵

高津儀一『土木要録』附録1（有隣堂・明治14年）
国立国会図書館デジタルアーカイブ画像利用



弁慶杵之圖

原家での聞き取り調査によると、^{なかまるこ}中丸子公園（中原区）そばの無量寺前の道は、多摩川の洪水に備えた堤防だったそうです。^{しもぬまべ}下沼部や^{かみひらま}上平間（いずれも中原区）に比べると中丸子の土地は少し高くなっていますが、それでも大正始めまでは水害がひどかったといえます。東横池（現在の等々力緑地辺り）のそばから小杉神社の脇を抜け、丸子へ抜ける道も、もともとは多摩川の堤防で桜の木が植えられており、この堤防の外を堤外地と呼んでいたそうです。

^{のぼりと}登戸（多摩区）にあった清宮家の前の道はオオドテと呼ばれていました。川崎市枳形こども文化センターの少し北に下った方から多摩川へつづく流れがあり、その堤防だったそうです。道路改修で堤防は低く、水路も現在は側溝になってしまい、当時の面影はありません。また、現代では多摩川から少し離れた場所にある久地の^{かすみ}かすみ堤（高津区）も多摩川の旧堤防の一部で、江戸時代中期頃築造されたと考えられています。

このように物理的な防災・減災対策をとると同時に、人々は水害に遭わないよう祈りました。水難除けの民間信仰は多摩川だけでなくどのような河川でも見られます。例えば、民家園に近い菅の渡し跡近くに置かれた「たとうさま」



かすみ堤：多摩川の旧連続堤の跡と伝わる

は水害から地域を守るために祀られた水神様です。現代では「たとう」がどのような意味なのかわからなくなっていますが、寛政2年（1790）の大洪水の際に、矢ノ口村・菅村境の決壊した堤防のところに祀られたとも、明治43年の水害のあとだとも伝わります。堤防を補強するための古い俵を貯えた小屋も近くに建てられました。また、中野島稲荷神社（多摩区）境内社の河除稲荷（^{かわよけ}河守稲荷）は、もともと多摩川の堤防を守るために堤防沿いに祀られていたのを、昭和39年に堤防拡幅にともない遷座したそうです。このように、水害除けや堤防守護を祈って祀られた社祠や石造物は多摩川沿いに多く見られます。



中野島稲荷境内にある河除稲荷

【参考資料】

- 立川市教育委員会『多摩川の生活—魚と伝統漁法』昭和55年
- 川崎市民ミュージアム『川崎の歴史—水と共同体—』昭和63年
- 日本地名研究所『川崎の町名』川崎市 平成3年
- 川崎市『川崎市史』別編 民俗 平成3年
- 川崎市『川崎市史』通史編2近世 平成6年
- 川崎市『川崎市史』通史編3近代 平成7年
- 川崎市立日本民家園収蔵品目録『3 船頭小屋・蚕影山祠堂』平成17年
- 川崎市立日本民家園収蔵品目録『5 旧清宮家住宅』平成18年
- 川崎市立日本民家園収蔵品目録『10 旧原家住宅』平成20年
- 池田大介「多摩川の成り立ちと改修の歴史」
日本河川協会『河川』75巻1号 平成31年

※ 掲載写真はすべて当園所蔵もしくは当園職員撮影による

日本民家園だより vol.101

発行：令和7（2025）年1月4日

川崎市立日本民家園 URL <https://www.nihonminkaen.jp/>

〒214-0032 川崎市多摩区枳形7-1-1 TEL 044-922-2181 FAX 044-934-8652

交通 小田急線「向ヶ丘遊園」駅下車南口より徒歩13分

開園時間 [3月～10月] 9時30分～17時 [11月～2月] 9時30分～16時30分（入園は閉園30分前まで）

休園日 毎週月曜日（祝日の場合は開園）、祝日の翌日（土日・祝日の場合は開園）、年末年始 ※臨時休園あり

入園料 一般550円、高校・大学生330円（要証明書）

65歳以上330円（川崎市在住の方無料、要証明書）、中学生以下無料

